

問一

親身に世話してくれた友人の何気ない私への言葉は、単なる批評であることを越え、彼の人柄を通じて私の心を打ち、真の人間関係へと目を向ける契機となったから。
（解答欄 3 行）

問二

自分のことしか考えられない私は、無邪気であっただけでなく、自分を支えてくれる他者の思いやりに無自覚な点で、それを蔑ろにしていると気づいたということ。
（解答欄 3 行）

問三

人並みの苦勞を知らないで生きてきたということではなく、人との関わりの中で自分を見出し、それを通じて世間の確かなありようを知ることがなかったということ。
（解答欄 3 行）

問四

書物における他人の言葉は、その抽象的な意味だけが自己の中に残っていくが、生身の人間の言葉は、取り込まれて自らの一部となりながらも独立の实在感を保ち、生きた他者として自己に訴えかけ続ける存在となるから。
（解答欄 4 行）

問五

本質的な他者との関係は、現実の日常において過ぎ去る時間の中で営まれるというよりも、言葉を通じて他者とのあいだに築かれた関係をもとに、人の生死や時間を越えた切実で生々しい対話を続けることにこそあるから。
（解答欄 4 行）

問一

空襲の直撃弾で死ぬといったことは、戦争末期の現実を生きる人々にとっては、取るに足りない些事ではなかったから。

（解答欄 2 行）

問二

隣部屋の少女が青春を思わせる声音で歌うシャンソンで目をさますのが「わたし」の安らぎとなっていたが、突然その少女が戦争の犠牲者となってしまうということ。

（解答欄 3 行）

問三

自分も含め、いつ誰が突然死ぬかもわからない戦争期において、時代状況や自然の変化に興味を抱かずにいた「わたし」は、意図したのではないにせよ、周囲の出来事から距離をとって生きていたと思われるということ。

（解答欄 4 行）

問四

東京全土を焼き尽くす大空襲で「わたし」のアルバムも書物もすべて焼失したのに、蔵書の古今集から和歌を記した一枚の紙片だけが焼け残ったという友人の話は、物語めいた情趣に富んでいて、合理的な説明を超えているから。

（解答欄 4 行）

問五

可憐な少女の死が示すような戦時の陰鬱な現実に対して、斜に構えて距離を置いていた自分と、戦後に旅先で見ただれ越しの藤の花に魅了されつつ、その花を手にとってみることはかなわない自分を重ね合わせ、自嘲の念とともに、自らの運命のようなものを感じているということ。

（解答欄 5 行）

問三

一

(1)

朝廷のお指図よりはいつそう手厚く、私は伊周様にお仕え申し上げようと思う。

（解答欄 2 行）

(2)

伊周様に直接お仕え申し上げようと思ひながらやはり自由に出歩くことがいたせませんので、私は今に至るまでお伺いしてお仕え申し上げていません。

（解答欄 3 行）

問二

有国が、道隆から受けた仕打ちへの恨みを抱きつつも、自分を厚遇し数々の品を贈ってくれるので、落ちぶれた我が身を思い知らされるようで、礼に合った謝意を有国に表せないほど、恥ずかしく身の置き所がない気持ち。

（解答欄 4 行）

問三

成忠は、長生きをしたために、先に死ぬはずの親が後で死ぬはずの娘の死に目にあうといった不条理なことを経験して、実に気の毒だということ。

（解答欄 3 行）

問四

京で母と別れて筑紫に流される時に、この喪服を着ておけばよかつたのになあ。あの時生き別れたことがそのまま母と私の現世での最後の別れであったことだよ。

（解答欄 3 行）